

子供にとって必要感のある授業づくり ～安全科「地震」の授業実践を通して～

池住 祐亮

はじめに

子供が主体的に学ぶためには、その学ぶテーマに対して「必要感」を感じる時ではないだろうか。子供の生活と関係していたりそのテーマを身近に感じたりするときに「考えてみたい！やってみよう！」と思うのではないだろうか。安全科「地震」の授業を通してこのような姿を実現することができたのかふりかえりたい。

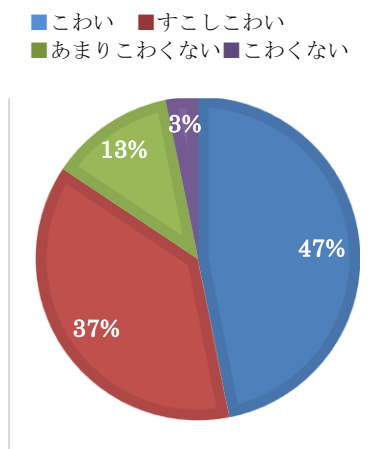
子供たちにとって「地震」はこわいのか

地震は短時間に起こる大規模な自然災害であり、最大級の被害をもたらすものでもある。日本は「地震大国」と言われるほど、多くの地震の被害に遭ってきた経験もある。子供たちも「地震」をキーワードとした話やニュースは今までに聞いたことがあると考えられる。

学級の子供たちが地震に対してどのようなイメージをもっているのかをより具体的に掴むためにアンケートを行った。アンケートの質問項目は「あなたは地震がこわいですか？」というものであり、「こわい」「すこしこわい」「あまりこわくない」「こわくない」のいずれかで選択している。(グラフ①) その結果グラフ①のように、3の「地震はあまりこわくない」4の「こわくない」と答えた児童が16%いた。理由としては「全く覚えていない。地震にあった覚えもない」「地震にあったことがないから」

が挙げられていた。このような子供は「安全性バイアス」が働き、自分に限って地震の被害に遭うことはないだろうと考えているのではないか。

学校では地震の避難訓練が行われる。避難訓練の際には予め、訓練をすることを予告しどこに避難するのかを確認した上で行う。子供たちにとってせつかくの訓練の場で、自分で考える場面がないのではないか。そのためにもし地震が起きても教師の言っていることを聞いていれば大丈夫と受動的な姿勢になってしまうこともある。



グラフ1 あなたは地震がこわいですか？
必要感が生まれる授業にするために

「きっと自分だけは大丈夫だろう・・・」と思う児童の考えも否定はせずに、今まで大きな地震を経験した子供たちの手記を読んだり緊急地震速報を流したりすることで地震は「いつ、どこで」起こる

か分からないものであることを改めて確認したい。大きな地震を経験した人の中には小学生も多く含まれている。その子供たちが何を感じ、何を考えたのかを手記を通して読み取ることで少しでも自分事として考えられるようにしたい。

地震は児童が学校にいる時に起きるとは限らない。もし登校中に起きた時に教師ではなくて、だれを頼ったりどこに避難したりするのかを考えていきたい。避難訓練のように近くに教師がいて指示ができるような場面は実は日常生活では少ない。実際に地震が起きた時にどのような判断をしなければならぬのかを子供たちなりに考えさせていきたい。

単元計画

- 1 駅から学校までの道を歩いて危険な所をさがす。
- 2 緊急地震速報が出たらどうするかを考える。
- 3 駅から学校までの間で地震が起きた時の行動について考える。

第一時

「駅から学校までの道を歩いて危険な所をさがす。」

子供たちと確認したのは「駅から学校までの間に地震が起こったらどんな危険なことがあるか」だ。実際にフィールドワークをしながら、グループに一台タブレットを渡して危険だと思ったところを写真に撮っていった。

本校では多くの子供たちが電車によって通学をしてくる。駅から学校までの登校ルートは同じになる。しかし、徒歩やバスで登校する子供たちは、駅から学校までのルートを頻繁には歩かない。学級み

んなで実際にフィールドワークをしながら「地震があつたらあぶなそうな場所を発見する活動」を通して普段は見えていない危険性が浮き彫りになってきたようだ。子供たちも「もしブロック塀がたおれたら・・・」「もし電柱がたおれたら・・・」と危険予測できた。危険ポイントを数十枚も写真にとれたグループもあった。



<フィールドワークは学年で行った>

第二時

「緊急地震速報が出たらどうするかを考える。」

子供たちは学校では多くの時間を教室で過ごす。授業では教室で授業中に緊急地震速報が流れたかどうかを？を考えた。

「頭を守るのは脳があるから」「動かないのは、上から物が落ちた時に危険だから」と、一つ一つの行動の意味を確認していくことはとても大切なことだと考える。この学習を通して、

○緊急地震速報が流れた時の基本的な行動

○教師や放送を聞いて行動することなどの基本的な知識の確認。

○地震は「いつ・どこで」起こるか分からないという地震の特性も共有することができた。授業の最後に教師が読み聞かせをした、阪神淡路大震災の小学生の手記が心に残った子供もいた。

子供たちのふりかえり

小学二年生の子が書いていた日記はどんなにくるしい思いをしていたか分かった

いつおこるか、どこでおこるか分からないじしんがおこってもお母さん、お父さん、先生のいうことをきくようにします。

第三時

「駅から学校までの間で地震が起きた時の行動について考える。」

駅から学校までの登校中に地震が起きたらどうするかを問題として授業を行った。前時では学校にいる時間に発生するという設定だったので、教師や放送の指示を聞いて行動することができた。

第三時の学びで大切にしたい観点は、子供たちが最適解を選択していくことだ。地震が発生した時に100%正しい答えはない。特に登校中は、教師や保護者がいないという状況で自分たち自身で様々なことを判断しなければならない。

本時では駅へもどるか学校へ行くかそれとも別の場所へ避難するかを選択する活動を通して、その状況にあった最適解を自分たちで導き出そうとしていた。子供たちが考えた視点としては、地震が起きた時は「広い場所にいないといけない」という点だった。多くのグループが駅や学校へ行かず、「公園」へ避難すると答えていた。また、教師からの追発問で「地震がおさまったら学校へ行くかどうか」を聞いた。子供たちは「その場にいる」「学校へ行く」で意見が分かれそれぞれの考えを発表することができた。

学校へ行くと答えた子供たちは「避難している場所が学校の近くだったら、様子を見て学校へ行ってもいいのではないかと考えていた。それに対して学校へ行かないと答えた子供たちの中には「近くの大人に助けをもらおう」という考えもあった。

子供たちのふりかえり

この授業でどこへにげたらいいのかどこがあぶ

ないのかを知りました。ぼくは駅が近かったらそこへ行く。遠かったらほかのどこかへひなんすることが大切だと思いました。

広いところ(公園)の真ん中ににげるとあんぜんだと分かりました。

ひなんする場所はいろいろあるけど、近くと思ったらいいにみんなの言うことはまとまっていて「公園」が多かったので近くでいったら「公園」があんぜんだなと思いました。



<根拠を探しながら最適解を導いた>

学習をおえて

子供たちの学び

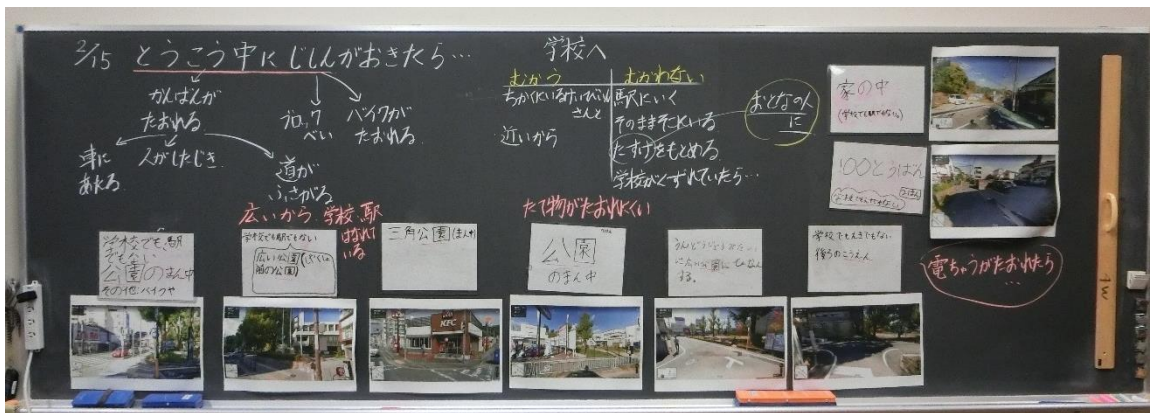
1 点目は地震が発生した時の危険性を、子供たちが身近に感じることができたという点である。本実践では、子供たちが学ぶ基盤としてフィールドワークを取り入れた。フィールドワークを取り入れることで駅から学校までで地震が発生したときの危険性をたくさん発見することができた。普段、通っている道に以外な危険性が潜んでいるということに気づいていけた。危険性を身近に感じることができたからこそ、学ばなければならないという必要感も生まれてきたのではないだろうか。

2 点目としては、地震が起きた時に子供たちが自ら選択する学習を通して、災害時には100%の答え

がないことを学んだということだ。実際に、大地震に遭遇した際の避難所で人数分の食料が配給されず誰を優先的に配給すればよいのか？という問題があったらしい。登校中、地震に遭遇した場合も同じように 100%正しい答えはないことに気づいていった。その中でも最適解を探していく導き出していく活動に意義があったのではないかな。

今後の課題点

課題としては、学校で行っている避難訓練を生かした第 3 時の展開が考えられたのではないかなということがあげられる。避難訓練の際は「まず低く」「頭を守り」「動かない」その後、運動場などの広い場所へ避難する。この一連の避難行動は、登校中でも応用できることを子供たちと確認し、改めて普段学校で行っている避難訓練の大切さを見つめなおすこともできたのではないだろうか。



<第三時の板書>